

Othello の ambivalence

舟 木 茂 子

Desdemona を自らの手で殺害した Othello は、彼をそこに至らしめたものが、全て、Iago の詭計であったことを知り、絶望のどん底に落ち込む。その彼を引き立てていこうとする Lodovico に向って、Othello は次のように頼むのである。

I pray you, in your letters,
When you shall these unlucky deeds relate,
Speak of me as I am; nothing extenuate,
Nor set down aught in malice. Then must you speak
Of one that loved not wisely but too well;

(V. ii. 342—346)

Othello は、Desdemona を言葉では言い表し得ないほど、深く愛していた。しかし、その愛し方が “wisely” ではなかったとすると、それは、どのように跡づけられるであろうか。

Othello と Desdemona の結婚は、1幕1場で、Iago の口から口汚く Brabantio に告げられる。次の2場で、Iago は、Cassio とその結婚について、次のようなやりとりをする。

Cassio : Ancient, what makes he here?

Iago : Faith, he tonight hath boarded a land carack;
 If it prove lawful prize, he's made for ever.

Cassio : I do not understand.

Iago : He's married.

(I. ii. 49—52)

Othello と Desdemona の結婚を “a land carack” にたとえて、それが “lawful” であれば、と Iago は言っている。一方娘 Desdemona が彼の気付かぬうちに、Othello の許に走ったことを知った Brabantio は、Duke に、娘は惑わされ、自分の手から盗まれたと訴える。それに対し Duke は、

Who'er he be that in this foul proceeding
Hath thus beguiled your daughter of herself,
And you of her, the bloody book of law
You shall yourself read in the bitter letter
After your own sense, yea, though our proper son
Stood in your action.

(I. iii. 65—70)

と、「法」に照しての詮議を申し出る。これを受け、Brabantio は、Othello の行為を次のように決めつけるのである。

I therefore vouch again
That with some mixtures powerful o'er the blood,
Or with some dram conjured to this effect,
He wrought upon her.

(I. iii. 103—106)

しかし、Duke は、

To vouch this is no proof,
Without more wider and more overt test
Than these thin habits and poor likelihoods
Of modern seeming do prefer against him.

(I. iii. 106—109)

と答え、Brabantio の言葉を退ける。代って、Senator の一人が Othello に質問を向ける。

Did you by indirect and forcéd courses
Subdue and poison this young maid's affections?

Or came it by request and such fair question
As soul to soul affordeth?

(I. iii. 111—114)

Iago の言葉通り、この場面は、Othello と Desdemona の愛を結婚という形でとらえ、それが “lawful” なものであるかどうかを見極めようとするものであるが、注目すべきは、“lawful” である条件は、Othello が “request and such fair question/As soul to soul affordeth” で、Desdemona を得たか否かである。人間を理性と情欲の結びついたものとしてとらえる Iago の “lawful” と、Duke や Senator の “lawful” は、決定的に違っており、Senator の言葉は Iago の世界にないものである。

Senator の求めに応じて、Othello は愛のいきさつを話し始める。Desdemona の父 Brabantio は、Othello を大層気に入っていて、しばしば彼を呼んで、彼の武勇談に耳を傾けていたことをまず述べ、さらに、壮大なイメージを駆使し、彼の半生を語る。そして、この話に Desdemona が如何に心を引かれていったか、また、その Desdemona をどのようにして得たか、彼らの愛のドラマを歌いあげる¹⁾。この Othello の言葉は、Duke や Senator の求める “lawful” な愛を証明するものとして受けとられる。

I think this tale would win my daughter too.

(I. iii. 171)

しかし、まだ納得しない Brabantio は、Desdemona に、一体誰に服従の心を捧げるつもりか問いただすと、Desdemona は、

My noble father

I do perceive here a divided duty.

...

I am hitherto your daughter. But here's my husband;

And so much duty as my mother showed

To you, preferring you before her father,
 So much I challenge that I may profess
 Due to the Moor my lord.

(I. iii. 180 ff.)

と答える。これで Othello と Desdemona の結婚についての詮議に、はっきりした答えが出される。Duke は Brabantio に次のようにとりなすのである。

Let me speak like yourself, and lay a sentence
 Which, as a grise or step, may help these lovers
 Into your favour.

(I. iii. 199—201)

ここで注意しなければならないことは、Othello が皆に語った、彼らの愛のいきさつの話しの性格である。Terence Hawkes は次のようにそれを明らかにしている。

... his 'round unvarnish'd tale' reveals a love based, not on the 'lower' reason, but on something beyond it. There is nothing 'rational' in this sense about Desdemona's love for Othello; in fact it seems irrational and illogical almost, so much is it higher than the 'lower' level on which Iago treats it. She loves Othello, not in a way that can be 'explained' or 'reasoned' about, but because she

saw Othello's visage in his mind;
 And to his honours and his valiant parts
 Did I my soul and fortunes consecrate.

(I. iii. 252 ff.)

It is communion of minds and souls rather than of bodies. 2)

Duke を始めとする Venice の社会は、この Othello の話しで言い表わされた愛を“lawful”なものとして受け入れたのである。

Othello と Desdemona の愛の本質は、地上的なもの以上のものであるが、その愛を語る話しの中に、我々の注意を引くものがある。Othello

は、“a round unvarnish'd tale”の中で、二人の愛のきっかけを、

She loved me for the dangers I had passed,
And I loved her that she did pity them.

(I. iii. 167—168)

と説明する。一方、先にみたように、Desdemona は、父 Brabantio に対する恩を感じつつも、夫として Othello を選んだことを表明し、その理由づけをしようとする³⁾。Shakespeare の作品の中で、*Othello* における Othello と Desdemona の愛のように、お互いが愛するようになった、すなわちそれぞれを選んだ過程や、理由を示そうとしている例は多くない。1幕の舞台になっている Venice は、人柄や、嚇々たる武勲故に、Othello を将軍として選び、Othello もこの Venice を彼の活動の場として選んだ。M. C. Bradbrook は次のように指摘している。

... like Desdemona, he belonged to a new society of chosen and contractual individualism. 4)

このように、*Othello* には、理性的な、新しい価値観を示す面が認められる。Othello と Desdemona の結婚を詮議する Duke は「愛」を、“the bloody book of law”に照らすべきであるとして、二人の愛の質を物語る“proof”を求めた。この時 Duke は、“soul to soul affordeth”ということとその“proof”として、二人の結婚という行為に正当性を見出した。論理的な理性の枠組みと、その理性を越えた愛という内容が、ここでは、なんら不都合さを見せずに融合しているといえる。この「愛」の受けとめ方、扱い方が、Othello にあっては、彼を破滅へと導いていくのである。

Desdemona の不実を Iago にほのめかされた Othello は、それを証明する“proof”を Iago に求める。この Othello をとらえて、Hawkes は次のように指摘している。

The moment Othello asks for proof of Iago, he has stepped down from the 'higher' world into the world of that 'lower' reasoning which will destroy him; he has stepped from the world of the spirit to that of the flesh. 5)

すなわち，“proof”を求めることは、すでに Iago の言葉に動かされている証拠である。しかし、ある問題に対して、たとえば Duke に見出せるように，“proof”を求めること自体は、決して誤ったことではない。問題は別のところにある。W. R. Elton は、*Othello* における“proof”を次のように見ている。

Between an innovating Renaissance empiricism and an obsolescent scholasticism, Shakespeare's plays move critically. From one point of view, it may be possible to approach *Othello* as a testing of that new empiricism. For, concerning Cassio and Desdemona, Iago has provided Othello with virtually all the evidence that a dehumanized and efficient empirical mind, devoid of the testimony of faith, love, and intuitive reason, might circumstantially collect. Indeed, the limitations of empiricism, albeit perversely distorted in the case of Iago, may suggest a critique of empirical data unmixed with human value. 6)

この Elton の見方からすると、Duke がより確実な証拠を求めた場面は、新しい経験主義が、魂と魂の結びつきから生じた愛を認めることにより、効果的に生かされた場面といえる。

Bradbrook が指摘した“individualism”や、Elton が指摘した“empiricism”という言葉は、多く Iago を評する際に使われてきたものである。しかし、すでにみたように、Othello と Desdemona が住む世界 Venice の Duke 達にも見出せ、さらに、Othello 自身の中にも見出せるのである。一方 Othello という人間の大方を支配するものは、神のイメージであり、秩序と調和の世界観であり、地球を中心とする宇宙観であり、万物の中心としての善なる人間観であるといえる。彼は、Desde-

mona との間に心と心，魂と魂の触れ合を求め，神の正義，徳，そして名誉を信じている。理想主義者であり，Desdemona にその理想の世界を見出している。さらに，母から譲られたというハンカチーフの magic に代表される，超自然界の力の存在をも信じている。

Othello には，Iago に代表される新しい時代の動きと，従来の宇宙観，世界観，人間観が共存し，なおかつ，主人公 Othello の中でも，その共存が認められるといえる。*Othello* における，二つの相反する価値観の共存は，天上的なイメージと，動物的で地上的なイメージの共存によっても表現されている。この他，相反するものの共存そして交錯，融合は，色々な面に認められる。Othello の顔の黒さと彼をとりまく白人達。この外見の美と醜さと，心の美と醜さの複雑な交錯。論理の世界と感覚の世界の共存等。これら相反するものの融合が，非常に簡単な形ではあるが，1幕3場の Venice の社会で示されているのである。Iago が Othello に働きかけるまでは，Othello の中で，相反するものが不都合さや，矛盾を生じさせず，平安な状態にあった。

舞台を Venice から Cyprus へ移すことは，まさにこの均衡のとれた状態に不安を感じさせるものである。Venice という世界は背後に押しやられてしまう。そして，新しい価値観を奉持し，しかも悪しき意図をもつ Iago と Othello の直接的な人間対人間のぶつかり合いを生み出す。Othello と Iago がぶつかり合い，絡み合ったとき，Othello における相反するものが，どのような形をとってあらわれるか，そしてどのような事態を生み出すかをみていきたい。

Iago は，Roderigo, Cassio そして Desdemona を利用し，Othello の心理状態をよくつかみ，巧みな言葉を使い，徐々に，しかも確実に Othello を揺さぶっていく。Iago は“jealousy”という言葉を繰り返し Othello の耳にそそぎ込み，ついに Othello の口から，その言葉を引き出すのである。すなわち，Othello は，その“jealousy”という言葉の魔力にとら

えられていく。

Think'st thou I'd make a life of jealousy,
To follow still the changes of the moon
With fresh suspicions?

(III. iii. 179—181)

しかしすぐに、彼は、断固次のように断言するのである。

No; to be once in doubt
Is once resolved.

(III. iii. 181—182)

この言葉は、Othello の性格を示すものである。曖昧の世界とは無縁な単純な性格を示している。Iago の前で、Othello は、彼と Desdemona の愛の結びつきを再び繰り返す。

Nor from mine own weak merits will I draw
The smallest fear or doubt of her revolt;
For she had eyes and chose me.

(III. iii. 189—191)

Desdemona が彼を選んだことへの確信、すなわち、「選ぶ」ということへの確信がみられる。また、この言葉は、理由や原因と、そこから引き出される結論という、一応論理的な思考形態をとっている。この態度と、先にみた単純な性格が結びつくと、

I'll see before I doubt; when I doubt, prove;
And on the proof, there is no more but this,
Away at once with love or jealousy!

(III. iii. 192—194)

となる。この態度自体には、特に不都合なところはない。論理的な筋の通った考え方である。Duke は、これを実行したのである。

Othello が自ら “proof” と言い出したことは、Iago の思う壺である。すぐに Iago は、この Othello の性格と態度を利用していく。その効果があられると、

Excellent wretch! Perdition catch my soul
 But I do love thee; and when I love thee not
 Chaos is come again.

(III. iii. 91—93)

と、Desdemona を絶対視していた Othello は、Iago に屈服する。

I am bound to thee for ever.

(III. iii. 215)

Othello の心の動揺はもう隠すことはできない。彼の使う言葉は、醜悪な動物的なイメージに満ちてきて、かつて万人にみせていた自信もぐらつきはじめる⁷⁾。しかし、Othello の心の中で、Desdemona に対する愛情が消えたわけではない。むしろ、変らぬ愛と、信頼を持ち続けているといえる。

If she be false, O, then heaven mocks itself!
 I'll not believe't.

(III. iii. 280—281)

この相反する感情が Othello の心の中にはっきり形成されたとき、彼は心の平静さを失うのである。

O, now for ever
 Farewell the tranquil mind! farewell content!

(III. iii. 349—350)

一度疑いを持った Othello は、即座にそれを解決しなければならず、しかも解決方法としては、理にかなった方法をとろうとする。

Villain, be sure thou prove my love a whore;
 Be sure of it; give me the ocular proof;

(III. iii. 361—362)

Iago に動かされ “proof” を求めたくなったとき、Othello の心の状態は、次の表現をとるようになる。

I think my wife be honest, and think she is not;
 I think that thou art just, and think thou art not:
 I'll have some proof.

(III. iii. 386—388)

全く対立したことをただ並べるだけである。

Hamlet は、Ghost の実体をつかみかね、彼をとりまく人達の正体や本心に疑念をもち、死後の世界に対する確信がゆらぎ、この中にあって、新旧の価値観の接点に立つ自己の存在を問い直さずにはいられなかった。この苦悩は、“to be, or not to be” という形で表わされている。しかるに Othello にあっては、相対立する思想や感情は、ただ共存するだけであり、言葉に表わされたときは、“and” で並記されて、その矛盾を自覚し、精神的な葛藤に至ることはない。従って自己に向けられる目はないのである。Othello は、ただひたすら Iago に “proof” を求め、Iago は、内心ほくそ笑みながら、次々と “proof” を積み重ねていく。自ら求めた “proof” を得た Othello の内には、皮肉にも、Desdemona に対する愛憎両感情が増すだけである。即座に解決せねばならない Othello が、このような状態で得た答えは、

... first, to be hanged; and then to confess.

(IV. i. 38—39)

という全く論理の転倒した世界である。この論理で彼は、自らを納得させていくのである。先に Elton は、Othello における経験主義の限界を指摘したが、これは、そのまま Othello の論理的な思考方法の限界を示すものである。4幕1場の終りに、Venice から Lodovico が、Othello の帰還の命令書をたずさえてくる。この知らせを聞いて喜ぶ Desdemona の気持を、Othello は “Indeed!” (IV. i. 238) といって、受けとめようとしない。この場面を G. R. Hibbard は、次のように評している。

... he draws the words and actions of others into the private night-

mare world of confusion and uncertainty in which he now lives. . . 8)

この混乱した “the private nightmare world” こそ、論理の転倒した世界といえよう。

Cassio と Iago が、Bianca を話題にして話しをするところを遠くから眺め、Derdemona を話題にしていると思ひ込んだ Othello の目の前で、駄目押しの証拠のハンカチーが、Bianca の手から Cassio に渡される。Othello は、“I would have him nine years a-killing” (IV. i. 177) と Cassio に対する復讐を口にするが、すぐに、“A fine woman! a fair woman! a sweet woman!” (IV. i. 178) と、Desdemona に対する変らぬ思いを表にあらわし、Iago に “Nay, you must forget that” (IV. i. 179) とたしなめられる。そこで Desdemona に対する憎しみが代って表に引き出され、彼女に対する復讐を誓う。

Ay, let her rot, and perish, and be damned tonight; for she shall not live.

(IV. i. 180—181)

しかしまたすぐ Desdemona に対する愛情が頭をもたげる。

O, the world hath not a sweeter creature: she might lie by an emperor's side and command him tasks.

(IV. i. 182—182)

Iago はまたあわてて、“Nay, that's not your way” (IV. i. 185) といったたしなめ、Othello の「嫉妬心」を復讐へと向けさせなければならない。このように、愛憎相反する感情が共存する Othello の苦しみを解決するためには、論理の転倒以外にない。その頂点を示す言葉が、

. . . I will kill thee,

And love thee after.

(V. ii. 18—19)

である。この逆転した世界に住む Othello と、その外にいる人達との間

に理解が成立するはずはない。Desdemona を詰問する Othello に向けて彼女は、

I understand a fury in your words,
But not the words.

(IV. ii. 32—33)

と言う以外にないのである。Desdemona を“whore”であると言って Othello が去ったあと、Desdemona はただ茫然とするばかりである。Emilia の“how do you, my good lady?”に答える Desdemona の答

Faith, half asleep. (IV. ii. 98)

は、Othello の世界に入り得ぬ彼女の状態をよくあらわしていよう。一方 Othello を動かし Cassio と Desdemona の殺害を決意させ、Othello を地獄へ突き落とし得ると思ったであろう Iago にも誤算があった。それは、Othello に Desdemona に対する憎しみが生じても、愛は消えず、彼女と Cassio を殺害する決意が、転倒した論理から生れたことを知り得なかったことである。Iago が目ざした方向へ Othello の行動は動いていったが、それを引き起す、Othello が立っている基盤は、Iago のそれとは違っているのである。3幕3場の祈りの場面で、Othello と Iago の二人は一体化したかにみえたが、最後まで、両者の立つ基盤の違いはなくなる。

5幕2場で、いよいよ、寝ている Desdemona の傍らに立って、自分を裏切ったと信じたが故に殺そうとしている場面で、Othello はこう言うのである。

Yet she must die, else she'll betray more men.

(V. ii. 6)

この理由づけが、転倒した論理の世界で彼をして‘judge’の立場に立たせる。

It strikes where it doth love.

(V. ii. 22)

すなわち彼の中では、殺人=“justice”という式が出来上るのである。相反するものの共存が、論理の転倒という形をとり、その上に立って、最後に、上の式を生み出すのである。Othello は、Desdemona に対する強い愛情と彼女を殺すという行為を、転倒した世界で、“It strikes where it doth love”という言葉で結びつけた。

転倒した世界を元に戻さねばならなくなったとき、すなわち、Desdemona の誠が明らかになったとき、Othello の彼女に対する愛と醜悪な殺人という行為を、他の人達には結びつけることができない。白人であるIago と顔の黒い Othello という設定は、黒人=黒、善人=白という伝統を逆用し、‘seeming and reality’のテーマにつながっている。Othello の顔の黒さは、3幕3場、彼がIagoによって動かされると、Othello 自身の意識にもはっきり出てくる。観客に、黒い顔の醜さを印象づけていく。

Her name, that was as fresh

As Dian's visage, is now begrimed and black

As mine own face.

(III. iii. 388—390)

この外見の醜さは、次第に Othello の行動の醜さに引きつがれていく。Othello の心の中を知る由もない Emilia は、彼の行為を次のように言う。

This deed of thine is no more worthy heaven

Than thou wast worthy her.

(V. ii. 163—164)

As ignorant as dirt! thou has done a deed —

(V. ii. 167)

この評は、他の人達全てのものであろう。行動にあらわれた醜さと、

Othello の Desdemona に寄せる愛に見出せる美とは、用心深く区別されている。

Othello は、Emilia, Iago そして Cassio に順次問いかけ、特に、皮肉にも Desdemona 殺害後になって、はじめて Cassio に直接問いかけ、彼の求めた “proof” は全て存在しなかったことを知る。Othello がかって見せた

My parts, my title, and my perfect soul,
Shall manifest me rightly.

(I. ii. 31—32)

という自信が通用しないことは、Othello 自身が最もよく知っていよう。

I have done the state some service, and they know't.
No more of that.

(V. ii. 341—342)

転倒した世界を支えた ‘proof’ が存在しなかったことが明らかになったとき、彼の論理は砂上の楼閣であったわけで、理性とか論理の枠組みは消され、Othello に残されたものは、Desdemona に対する愛だけである。これを知り得るのは彼ただ一人で、他の人達は、殺人という行為を知るだけである。Desdemona に対して醜悪な行動をとった Othello は、“a malignant and a turbaned Turk” (V. ii. 355) に等しく、高潔で、勇敢な将軍として、彼は自らを倒さなければならない。これで Othello は、彼に残された愛を全うし得たのである。愛と憎しみが同居した ambivalent な状態は解け、Desdemona に口づけをしながら、彼は彼女と一つになり得た。この Othello の “journey” を知るものは、彼の死に居合せた者のうち、一人もいない。こうした彼らに向って、Othello は、最初にみた “one that loved not wisely but too well” という言葉で、自らを語ったのである。

注

Text は Alice Walker & John Dover Wilson (ed.), *Othello*, Cambridge U. P., 1957 を使用した。

- 1) I. iii. 128-169.
- 2) Terence Hawkes, *Shakespeare and the Reason*, London, Routledge & Kegan Paul, 1964, p. 107.
- 3) I. iii. 250-254.
- 4) M. C. Bradbrook, "Shakespeare the Jacobean Dramatist," *A New Companion to Shakespeare Studies*, Cambridge U. P., 1971, p. 147.
- 5) Hawkes, *op. cit.*, p. 109.
- 6) W. R. Elton, "Shakespeare and the Thought of His Age," *A New Companion to Shakespeare Studies*, Cambridge U. P., 1971, p. 196.
- 7) III. iii. 260-279.
- 8) G. R. Hibbard, "'Othello' and the Pattern of Shakespearian Tragedy," *Shakespeare Survey 21*, Cambridge U. P., 1968, p. 42.